オーディオ実験室収載

ターンテーブルアキュライザーの導入(6)
－Garrad401 への適用(1)－

１．始めに

インフラノイズ社から、ターンテーブルアキュライザーTACU-1 が発売されたとの情報を入手し、前報(1)の計画に従って評価をしていきます。今回は、Garrad401 に使用してみます。

２．ターンテーブルアキュライザーTACU-1 の試聴方法

Grrad401 再生の現状は下記のとおりです。

アナログプレイヤーの比較試聴(18)

Garrad401→47 研 4718→Brooklyn DAC+(Line 入力)→TruPhase

カートリッジは ZYX R100-EX、アームは FR-64S、フォノステージは 47 研 4716 へのダイレクト入力です。

さらにターンテーブルシートは THE FUNK FIRM の Achromat（黒色）を、スタビライザーは Audio Technica 製のものを、インシュレーターはインフラノイズ製のマグナライザーを使用しています。

このスタビライザーを外して TACU-1 に交換します。

音源は聴きなれた下記を使用します。

ARCHIV　28MA0020

J.S.バッハ　チェンバロと弦楽のための協奏曲　BWV1052・1053・1054

トレヴァー・ピノック指揮イングリッシュコンサート

ドイツグラモフォン　MG8333/4

ニコロ・パガニーニ　24 の奇想曲

サルヴァトーレ・アッカード（Vn）

CBS SONY SOCL 36　Horovitz on Television

フレデリック・ショパン　Polonaise in F-Sharp

Nocturne in F

Ballad in G　他

ウラディミール・ホロヴィッツ(pf)

TOKYO FM TFMLP1051-1053

J.S.バッハ　無伴奏チェロ組曲

ピエール・フルニエ（Vc）

３．ターンテーブルアキュライザーTACU-1 の試聴結果

上記の音源はいずれも再生上なんらかのハードルがあるもので、再生上のポイントは前報(2)で述べたとおりです。

チェンバロと弦楽のための協奏曲は、上記のスタビライザーの状態でも、歯切れのよい躍動的な再生ですが、TACU-1 を適用しますと、よりディテールの再現が進み、チェンバロとアンサンブルのやり取りが整ってきます。

24 の奇想曲は、上記のスタビライザーの状態でも、アッカードのテクニックの冴えは聴き取れるのですが、TACU-1 を適用しますと、より微妙なボウイングとそれによる表現が分かりやすくなります。

Horovitz on Television は、上記のスタビライザーの状態でも、TV 放映のためのライブ演奏らしい雰囲気が出ていますが、TACU-1 を適用しますと、ピアニッシモの表現がより鮮明になり、フォルテッシモで余分な響きが乗ってきていたのが整理され、ホロヴィッツがショパンをどう表現しようとしているかが捉えられやすくなります。
無伴奏チェロ組曲は、上記のスタビライザーの状態でも、ライブ録音らしい生々しさがありますが、TACU-1 を適用しますと、生々しさの粗削りのところが後退し、チェロの艶が向上し、ボウイングの動きが把握しやすくなります。
Garrad401 は、1965 年から 1977 年にかけて製造されていた、古いアイドラー式のプレイヤーであり、TACU-1 がどのような効果を発揮するか興味がありましたが、このような古いメカのプレイヤーでも効果が現れることが分りました。

４．まとめ

Garrad401 のような旧式のシステムにおいてそれぞれ再生上ハードルのあるアナログ盤において TACU-1 の効果を認めました。

以上